

2018年度 事業報告書

1. 法人の概要

設置する学校・学部・学科

国立音楽大学

音楽学部

演奏・創作学科、音楽文化デザイン学科

演奏学科、音楽文化教育学科、音楽教育学科

別科

大学院

音楽研究科

国立音楽大学附属高等学校

音楽科

普通科

国立音楽大学附属中学校

国立音楽大学附属小学校

国立音楽大学附属幼稚園

役員概要

理事会

理事長 長尾達則

監事 村山利夫

杉浦正和

理事 内野好郎

藤掛聖二

久保田慶一

古川 聡

武田忠善

吉成 順

花岡千春

大学

学長 武田忠善

副学長 久保田慶一 副学長 古川 聡

中学校、高等学校

校長 星野安彦

小学校

校長 星野安彦

幼稚園

園長 山崎信政

学校法人の沿革

学 校 法 人 の 沿 革 (概 要)	
大正 15 年 4 月	東京高等音楽学院創立(仮校舎を東京市四谷区番衆町)。 予科、本科(声楽・器楽・作曲)、高等師範科を置く。
11 月	国立大学町(昭和 27 年、文教地区に指定される) に校舎が竣工し移転。
昭和 16 年 8 月	中等学校音楽科教員無試験検定の認可。
昭和 22 年 7 月	国立音楽学校と改称。
昭和 23 年 5 月	財団法人国立音楽学校となる。
昭和 24 年 4 月	国立音楽高等学校・国立中学校設置。
昭和 25 年 4 月	国立音楽大学設置(声楽・器楽・作曲・楽理・教育音楽)。
7 月	国立幼稚園設置。
9 月	楽器研究所附設設置。
昭和 26 年 2 月	学校法人国立音楽大学に組織変更。
4 月	別科(作曲・声楽・器楽・調律専修) 設置。
昭和 27 年 7 月	附設保育科設置(幼稚園教諭養成機関として認可・1年制)。
昭和 28 年 4 月	国立音楽大学附属小学校設置。
昭和 30 年 4 月	大学に第2部を設置。
昭和 31 年 4 月	大学専攻科(作曲・器楽・声楽・楽理・教育音楽専攻) 設置。保育科を改組し、 幼稚園教諭養成所(幼稚園教諭養成機関として認可・2年制) とする。
昭和 35 年 2 月	幼稚園教諭養成所が各種学校となる。
昭和 37 年 4 月	別科は調律専修を除き学生募集停止。
昭和 38 年 4 月	大学教育音楽学科に幼児教育専攻を増設。 国立音楽高等学校に普通科を増設。
昭和 41 年 4 月	大学上水台校舎(立川市柏町)で授業開始。
昭和 43 年 3 月	大学院音楽研究科(修士課程) を設置。
昭和 44 年 3 月	大学専攻科廃止。
昭和 50 年 4 月	法人本部を国立市から立川市へ移す。 附属の各校(園)名を変更し統一する。 国立音楽大学附属音楽高等学校 国立音楽大学附属中学校 国立音楽大学附属小学校 国立音楽大学附属幼稚園
昭和 51 年 4 月	音楽研究所、楽器技術センターを設置。
昭和 53 年 3 月	大学位置変更(立川市柏町)。 附属音楽高等学校・中学校位置変更(国立市西)。
昭和 54 年 6 月	大学第2部廃止。
昭和 63 年 4 月	楽器学資料館設置。
平成 2 年 4 月	大学学科名一部変更。楽理学科を音楽学学科、教育音楽学科を音楽教育学科とする。
平成 16 年 4 月	大学学科再編(演奏学科・音楽文化デザイン学科・音楽教育学科)、収容定員減及びカリキュラム改編
平成 16 年 4 月	附属高等学校普通科の男女共学化、及び校名変更(国立音楽大学附属高等学校)。
平成 19 年 4 月	大学院音楽研究科音楽研究専攻(博士後期課程)設置。
平成 23 年 4 月	大学に演奏学科ジャズ専修を新設。
平成 23 年 5 月	大学新 1 号館竣工。
平成 26 年 4 月	大学学科再編(演奏・創作学科、音楽文化デザイン学科)、収容定員減及びカリキュラム改編。
平成 30 年 4 月	別科調律専修学生募集停止
平成 30 年 12 月	大学 7 号館竣工。

2. 2018年度事業の説明にあたって

2018年度決算は5月22日の理事会において承認されました。また監事からは、本法人の業務及び財産の状況は適切であるとの「監査報告書」が理事会及び、評議員会へ提出されました。

3. 2018年度 事業の概要

2018年度の事業内容について教育研究事業、施設の整備、財政基盤の充実と経営管理体制の強化に区分して説明いたします

1) 教育研究事業（大学、中高、小学校、幼稚園）

大学学部及び大学院

<キャンパス整備>

安全で、充実した、持続可能な教育環境の整備を目的として推進されてきたキャンパス整備計画ですが、食堂および学生厚生施設、地域への文化発信基地としての機能を有した7号館が完成し、一連のキャンパス整備計画は終了しました。

<教育改革>

2014年度から行われた学科再編とカリキュラム改訂の完成に伴い、授業科目の整理、コース制度の見直しを行っています。新たにミュージカル・コースを設置しました。

<学生支援>

学生たちの課外活動は、芸術祭のみならず、七夕祭、MUSICスペースなどの催事や、近隣の学校・施設等での音楽活動・指導など、教職員によるサポートを得ながら、活発に行われました。

キャリア・就職支援では、3年生の基礎ゼミでの振り返り、キャリアカウンセラーによる面談を始め、多くの講座や説明会が開催されました。

臨床心理士や精神科医によるカウンセリング、教員による面談など、学生相談のさまざまな場が引き続き提供され、非常勤教員も含めた全教員によるオフィス・アワーも実施されました。

<演奏活動>

演奏教育の成果として実施する定期演奏会では、オーケストラに準・メルクル氏、現田茂夫氏、ブラスオルケスターにF・ブーランジェ氏を迎え、客演指揮をお願いしました。海外からの著名な演奏家を迎えた公開レッスン、公開講座も多数開催されました。

<コミュニティ・ミュージック・センター（KCMC）>

本学がこれまで行ってきた事業の強みとして、地域との連携・社会貢献が挙げられますが、今後はKCMCが中心となって推進していきます。立川市、国立市、武蔵村山市と連携・

包括協定を締結し、小・中学校の音楽鑑賞教室、地域での音楽講座などのほか、武蔵村山市とはアクティブ・ラーニングの授業も開講しました。

大学の教育活動とは切り離して、卒業生の学びの機会を充実させるために、専攻実技の研鑽を積むための「ディプロマ・コース」を設置しました。

<学生募集活動>

広報センターでは、中学生・高校生、音楽大学に興味のある方に、気軽に本学を体験していただくための一連のプログラムを「くにたちプレカレッジ」と位置づけ、進学ガイダンス、オープンキャンパス、授業公開、受験準備講習会や、昨年度より新たに始めたバスツアーを行ってきましたが、新たに音楽指導者向け説明会も始めました。

<図書館>

2016年11月に全館リニューアルオープンした図書館ですが、システムも新たに変わり、OPAC検索画面の変更、機能の充実を図りました。

竹内道敬文庫という近世日本音楽に関する貴重資料があり、立命館大学アート・リサーチセンターとの共同研究により電子化を行ってきましたが、「竹内道敬文庫デジタル・アーカイブ ー錦絵の部ー」として、インターネットでの公開を始めました。

<楽器学資料館>

世界各地の楽器を系統的に収集・展示するとともに、楽器に関する調査、文献・音資料の収集、目録・資料集の作成、楽器の修復などを行っていますが、楽器収集の活動をまとめた冊子「楽器コレクション管理資料集 2」を刊行しました。専門の演奏家による解説を交えた「レクチャーコンサート」も多数実施しました。

<音楽研究所>

2015年度より「20世紀前半アメリカ音楽研究部門(通称 ガーシュイン・プロジェクト)」として活動していましたが、最終年度となる2018年度は、「歴史の中のアメリカ音楽」をテーマに、「模索から浸透へ：花開くアメリカ音楽」と題する演奏会を開催し、ミュージカル「オズの魔法使い」(演奏会形式)を上演しました。

<大学院>

例年高い評価を受けている大学院オペラは、阪 哲朗氏を指揮者に迎えて、モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》を上演し、好評を博しました。修士課程、博士後期課程とも、入試、カリキュラム、教員組織など、大学院改革に取り組みました。

附属中学校、高等学校

<新入生>

2018年度は中学校 72名、高等学校 152名（音楽科 106名、普通科 46名）計 224名の新入生を迎えてのスタートとなりました。

特筆すべきは音楽科において、定員 105名を上回る新入生を迎えることができたことです。これは推薦入学試験において導入した調査書型入試が定着したことを示すもので、新入学者の数も 2016年から 79名、86名、106名と確実に増加しています。

<新任教員>

本校もいよいよ教員の世代交代の時期に入り、英語、国語、数学、音楽、体育の教科で計 6名の新任専任教員をお迎えしました。今後も多くの定年退職者が出る為、学校設置基準に基づいた教員採用計画は次年度以降も続く予定です。

<公開レッスン、レクチャー>

毎年恒例となったヴィレム・ブロンズ先生によるピアノ公開レッスン、アンナ・マリア・ローザ先生の声楽公開レッスンをはじめ、10月4日には中2、高1の生徒を対象に古楽器のレクチャーを初めての試みとして行いました。

また、例年行っている附属幼稚園における実習体験に先立って山下副園長による事前学習の他、教員を対象に東京大学教授である市川先生をお招きし、「アクティブ・ラーニング」に関するレクチャーを実施しました。昨年度末の3月13日には附属幼・小・中高の教員を対象に、吉田友子先生をお招きし「自閉症スペクトラム・発達障害」に関する講演を行いました。

<演奏会・地域交流>

11月29日にはポーランドより来日したリック・テノールのピョートル・ニキエル氏によるポーランドのクリスマスキャロル「コレンダ」の演奏会を、本校生徒ホールにて行いました。また恒例行事となっている国立市の点灯式での演奏を始め、ソリストコンサート、オーケストラ定期、くにたち音楽会も例年どおり開催され、特にくにたち音楽会合唱の部では今回、盛田麻央、林美智子、矢田部一弘、秋川雅史各氏をソリストとしてお迎えしての演奏会となり、当日は立ち見が出る盛況となりました。9月24日にはJR nonowa 国立とコラボし、国立駅南北連絡通路にて本校生徒によるスペシャルライブコンサートを行いました。

<海外交流>

4月11日にスウェーデンの音楽学校より視察団が来校し、合唱の授業を中心に授業見学を行い、11月24日には韓国の檀國大学から理事長以下ご一行がソルフェージュの授業及び各専攻実技の視察に訪れました。

また、オーストリア、リンツ高校にはターム留学生1名を派遣しました。

<併設音楽教室 Music atelier>

開設2年目を迎え、12月に初となる発表会を開催。教室生より中学へ2名、高校音楽科へ2名の進学者を輩出しました。

附属小学校

<改革プロジェクト>

音楽と関連した教育の研究

2018年度は国語で谷川俊太郎氏の「生きる」を勉強し、自分たちで「生きる」をテーマに詩を制作しました。その中から何編(5~6)か選び出し、それらの詩を元にイメージされる音、リズムを打楽器により加え、朗読を行うというコラボレーション授業を行い、卒業発表会の最後に実演することにしました。これは試みの一つであり、このまま行うということではなく、これを元にして、更なる研究と工夫を重ねて、児童の自主性を引き出し、小学校6年間で培ってきた学力が統合された表現を目指していきたいと考えています。結果的にこのことが、子どもたちの意欲向上や好奇心を掻き立てることへと繋がり、普段の学習のモチベーションアップへと展開させていきたいと考えています。

<教育内容の充実>

①校内研究

「表現できる子どもの育成」をテーマに3年間、計8回の授業研究会を実施しました。自由、自主、自律に繋がる表現サイクル(受け止め→整理→関係付け→表出)に行きつくなど興味深いことが多々あり、次年度、研究チームがまとめに入ります。

②基礎学力の向上

各教員が意見交換をし、取り入れられる部分を取り入れ、各自教科法に生かし授業に取り組み、さらに意見交換を行いました。

③宿泊行事

宿泊行事の登山では2.3年生が名栗村正丸峠、4.5年生が日光白根山、6年生が菅平四阿山(あずまやさん)登頂を目指しました。残念ながら6年生は天候不良で登山を行うことができませんでした。他学年は登頂による達成感を得ることができました。防災への意識向上を図る防災泊(1.6年)では体育館に泊まり、防災食を食べ、タオルでの体の拭き方、ウェットティッシュによる歯磨きも体験しました。立川消防署員による煙体験及び消火器と三角巾の使い方も学び、防災への意識向上に繋がりました。

<生活指導の徹底>

①心の教育

子どもが在校中は教職員打ち合わせの時間を極力取らず、教師と子どもの触れ合う時間を大切にしました。そして、この時間は、教師が子ども同士を見守る時間にもなりました。子どもが下校した後の打ち合わせでは、子どもの情報を共有して、教育に繋がま

した。縦割り班活動（ONSHO TIME）ではランチタイムを定期的に設け、異学年の子どもたちの交流も深めました。

②規律ある生活

毎月生活目標を各部屋に提示し、規律ある生活を目指しました。「音小新しいなかま手帳」を4月のわかば会（PTA）総会で用いて説明し、家庭と学校で共通理解を深めました。

<応募者増の広報活動>

①広報活動の再点検

HP、スクールガイドで「音楽が支える学力」をうたい、次年度に向けてホームページ、スクールガイドを新しくしました。HPのトピックスの更新も頻繁に行い、学校の情報を伝えました。幼児教室の訪問も継続して行いました。

②各種説明会

附属幼稚園保護者説明会（5月）、学校説明会（6.7.9月）、プレスクール（7.9月）、サマーコンサート（8月）、公開授業（9月）、ウインターコンサートと造形作品展（12月）、陶芸絵付け体験会（1月）、中央線沿線合同相談会（2月）、スプリングコンサート（3月）などを継続して行いました。仕事を持っている保護者のために夜の説明会（6月）を新たに実施しました。土曜日に稽古事や幼稚園行事が入っていることも多いので、日曜日を設定しました。プレスクール、公開授業の回数も増やしました。3回の学校説明会では参加人数が前年度よりも52名増えました。

<その他>

保護者音楽レッスン

子どもへの理解度を増し、小学校から大学まで、国立で音楽の勉強を続けていくことに、興味を持ってもらうことが大切であると考え、2018年10月より実施を開始しました。10月からの実施なので、ピアノ2名の受講に留まっていますが、2019年度新入生保護者説明会で紹介すると是非にという声が多く、受講者2名が1年生保護者であることを考慮すると、今後も学校説明会でのPRが中心になると思われます。

学童クラブ「アウラ」

国立駅前にある学童クラブ「アウラ」を説明会で紹介し、共働き家庭へ対応しました。

附属幼稚園

<施設設備の充実>

園庭アスレチックの一部改修、並びに、園庭南側<川>の法面木部杭の取り替え工事を実施し、安全面はもちろんのこと美観面も改善されました。

園舎北西角壁面に園案内看板を設置しました。

<質の高い保育内容の実現>

本園の初代園長小林宗作が唱えた子どもを中心に据えた教育理念を基に、本園が園児にとって心も身体もリズミカルに動き、いろいろな体験を積み重ねることができ、豊かな経験につながる場となるように、職員が研鑽を重ねティームティーチングにより教師集団が一丸となり、質の高い保育内容の実現を目指しました。年間の教育週数は40週を超え保育日数も年少児190日、年中児191日、年長児192日となりました。

<保育後の園庭開放>

子どもたちが安全に遊べる場所として、保育後の園庭開放を通常保育時に保育終了後午後3時まで実施しました。

<預かり保育の実施>

保育ニーズに応えるために、預かり保育を通常保育時に多目的室や園庭、雨天時は遊戯室を利用して保育終了後から午後4時30分まで実施しました。本園教員と学生(週2日)により担いました。預かり保育の内容は、子どもたちにとって通常保育と違う楽しみもあり保護者にとっても安心して預けられる場となりました。

<課外レッスンの実施>

保育終了後に保育室に於いて、年中児・年長児の希望者を対象にピアノとヴァイオリンの課外レッスンを実施しました。講師は、附属小学校、中学校・高等学校にて指導している先生方に担っていただきました。

<子育て支援事業>

子育てをしている地域の方々に対して、園庭開放5回、親子リトミック4回、夏と冬の親子コンサート2回、親子製作遊び1回、合計12回の講座を開催しました。

なお、夏の親子コンサートでは音大生による打楽器アンサンブルを、冬のコンサートでは課外レッスンの先生方によるピアノ独奏や二重奏、さらに、本園教員によるユーフォニアム演奏や合唱等、盛りだくさんのプログラムで、子どもたちは興味津々の様子で楽しそうに鑑賞していました。

<プレ幼稚園>

未就園児親子対象に、親子で幼稚園に慣れたり集団を経験したり、本園の教育内容理解を図るために2018年6月から2019年3月まで実施しました。また、12月以降は2019年度本園入園予定者に向け、慣らし保育を別枠にて実施しました。

<園児と幼児教育専攻学生、附属中学高校生、附属小学生との交流>

本学の幼児音楽教育専攻学生の教育研究や、研鑽の場となるように学生を5名受け入れました。学生にとって子ども理解の深化とともに、実践力を培う場となりました。また、

附属高等学校の生徒と園児の交流の場を設け、生徒にとっては、職場体験とともに、将来に対する夢や希望を持つことを期待するものです。9月に6名受け入れました。附属小学校児童とは、園児にとって遊びの伝承や新しい知識を享受する機会となるため2月に交流会を持ちました。

<講演会の実施>

在園児保護者との教育懇談会時に、音大幼児音楽教育専攻教授 林浩子先生を講師に迎え講演会を実施し、本園教育の理解と共に子育て中の保護者の学びの場となりました。

<広報活動の充実>

ホームページにて、毎月の行事や保育の状況をリアルタイムでアップし、幼稚園での保育内容や行事の様子を外に向けてアピールしました。

2) 施設の整備

- ・2018年度に1号館の解体工事を行いその跡地に7号館新築工事を着工して、2018年度に完成しました。7号館は学生食堂、学生厚生施設を中心とした施設です。
- ・2018年度に中高1号館の空調設備改修工事を実施しました。

3) 財政基盤の充実と経営管理体制の強化

- ・キャンパス整備計画と財務状況

新1号館の建設をはじめとするキャンパス整備計画は、2016年度の大学4号館改修工事の終了に伴い既存施設の耐震補強及びリニューアル工事は完了しました。キャンパス整備計画の集大成として、2017年度に大学1号館を解体して食堂及び学生ホール等の機能を有した7号館が2018年度に完成しました。キャンパス整備に関する支出が続く中で、基本金組入前収支差額は昨年を引き続き支出超過となりました。支出超過の要因は、学生数の減少に伴う納付金及び経常費補助金の収入減ですが、人件費や業務委託費の見直しなど経常的な費用の削減に努めています。

なお、キャンパス整備に関わる資金は全て自己資金で賄っています。2018年度のキャッシュフローは7号館建設工事費の支払いにより前年比マイナスとなりましたが、活動区分資金収支における教育活動資金の収支差額は4億3400万円の収入超過であることから、依然として高い資金量を確保しています。

- ・寄付金事業の推進

2017年度に7号館建設募金を立ち上げ、多くの方々からご支援をいただき、2018年度までの寄付金の合計額は4000万円を超えました。2019年度には新たな寄付金募集を実施する計画です。

- ・内部監査の実施

内部管理体制強化の観点から内部監査を行いました。対象部門は経営企画室と大学改革推進室でした。また、前年度に監査対象となった部署へのフォローアップ監査も

実施しました。

4. 2018 年度決算及び財務の概要

2015 年度から学校法人会計基準が改訂され、新たな計算書様式が適用されました。主な計算書は資金収支計算書、事業活動収支計算書、貸借対照表から構成されています。事業活動収支計算書は収支状況を活動区分別に示し、経常的な収支と臨時的な収支に大別しています。活動区分別の収支状況を確認する上で重要な役割を果たすものですので、事業活動収支計算書の概要から説明します。

なお、金額は十万円単位を四捨五入して百万円単位で表示します。

1) 事業活動収支計算書

(1) 教育活動収支

(収入の部)

「学生生徒等納付金」は 37 億 10 百万円で、予算比 8 百万円増加しました。前年実績比では 1 億 72 百万円減少し主な要因は大学（大学院等含む）で 1 億 68 百万円減少したことによります。前年実績比では中高で 10 百万円増加し、小学校で 18 百万円減少しました。また、幼稚園は 3 百万円増加しました。

「経常費等補助金」は 6 億 54 百万円で、予算比 36 百万円減少しました。内訳は国庫補助金 1 億 96 百万円、地方公共団体（主に東京都）補助金 4 億 58 百万円です。

「付随事業収入」は 36 百万円で、寮や受験準備講習会などの補助活動収入と本学主催の演奏会収入に区分されています。

「雑収入」1 億 1 百万円で、主に私立大学退職金財団などからの退職交付金収入です。退職者数が減少しましたのでこれに伴い退職交付金も 96 百万円減額しました。

以上、教育活動収入の合計は 45 億 54 百万円で、学生生徒等納付金の占める割合は 81%になっています。

(支出の部)

「人件費」は 30 億 49 百万円で、当初予算を超過したことから予備費を 2 百万円使用しました。予算超過の要因は自己退職者への退職金です。人件費の内、教職員人件費は 28 億 90 百万円で前年実績比 1 億 61 百万円減少しました。

「教育研究経費」17 億 19 百万円で、減価償却費は減少しましたが、その他の項目は前年実績比で 8 百万円増加しました。予算比では 1 億 46 百万円の減少です。主な減少要因は報酬委託手数料の業務委託費、消耗品費等の減少によるものです。

「管理経費」は 4 億 44 百万円で予算を超過しました。7 号館建設に伴い減価償却費が増加して予算比では 91 百万円の増加となりました。

以上、教育活動支出の合計は 52 億 12 百万円となり、教育活動収支差額は 6 億 58 百万円の支出超過になりました。

(2) 教育活動外収支

主な収入は受取利息の 98 百万円です。

以上、教育活動収支と教育活動外収支を合算した経常収支差額は5億50百万円の支出超過となりました。

(3) 特別収支

主な収入は、施設設備寄付金として7号館建設募金13百万円、施設設備補助金として1号館耐震改築補助金の1億82百万円など、合計で2億8百万円となります。収入の多様化を図るため、寄付金、補助金の獲得に努めています。

また、支出は図書などの除却に伴う処分差額9百万円です。

以上、特別収支差額は1億99百万円の収入超過となりました。

<基本金組入前収支差額>

経常収支差額と特別収支差額を合算した基本金組入前収支差額は3億51百万円の支出超過となりました。前年度の決算額に比較すると、支出超過額が3億15百万円減少となります。前年度は1号館解体費用の特殊要因があります。この特殊要因を除くと、学生生徒納付金が前年比1億72百万円減少したにもかかわらず、基本金組入前収支差額は前年度決算に比べ、支出超過が24百万円減少しました。これは、教職員一体となった様々な工夫により、業務委託費や人件費の削減に努めた効果によるものです。

<当年度収支差額及び翌年度繰越収支差額>

以上の結果から当年度収支差額は11億14百万円の支出超過となり、翌年度繰越収支差額は70億10百万円の支出超過になりました。

2) 資金収支計算書

資金収支計算書は法人全体の資金の出入りを示したものです。事業活動収支計算書と重複する内容を除き、主な内訳は次の通りです。

(収入の部)

「資産売却収入」3億3百万円は、主に国債の売却に伴う収入です。

「前受金収入」6億73百万円は、2019年度の計上となる納付金収入などを2018年度内に受入れた額です。

「その他の収入」8億31百万円は、前期の未収入金受入れ額などです。

「資金収入調整勘定」は、当期に実際の資金収入がない期末未収入金などの調整項目です。

(支出の部)

「施設関係支出」16億25百万円は、7号館建設工事と中高1号館及び体育館空調改修工事費用などが主な内訳です。

「資産運用支出」6億95百万円は、国債の売却額を含めた資金を基に劣後債を購入したものです。

「その他の支出」2億62百万円は、前年度未払金の支払額や仮払金などの支払額です。

「資金支出調整勘定」は、当期に実際の資金支出がない未払金などの調整項目です。
以上、当期の資金収入と資金支出をまとめると、次年度繰越資金は 15 億 77 百万円
となりました。

3) 貸借対照表

資金収支計算書、事業活動収支計算書をもとに 2018 年度末の資産、負債及び純資産を
示しています。資産合計は前年度に比べて 3 億 41 百万円減少しました。内訳は固定資産
が 8 億 32 百万円増加し、流動資産が 11 億 72 百万円減少しました。また、負債は 11 百
万円増加し、純資産（基本金及び翌年度支出超過額）は 3 億 51 百万円減少しました。

資料 1：事業活動収支の推移

(百万円)

	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度
①事業活動収入計	5,486	5,263	5,183	4,870
②事業活動支出計	5,590	5,552	5,850	5,221
③経常収支差額	△ 262	△473	△822	△550
④基本金組入前当年度収支差額	△ 104	△289	△666	△351
⑤基本金組入額	△144	△1,413	△258	△763
⑥当年度収支差額	△ 248	△1,702	△924	△1,114
⑦前年度繰越額	△ 3,496	△3,744	△4,972	△5,896
⑧基本金取崩額	0	474	0	0
⑧翌年度繰越額	△ 3,744	△4,972	△5,896	△7,010

資料 2：学生、生徒数の推移

(名)

	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度		平成 30 年度		
	5/1 現在	前年比	5/1 現在	前年 比	5/1 現在	前年比	5/1 現在	前年比	
大 学 院	84	+6	89	+5	91	+2	91	±0	
学 部	1,680	△85	1,563	△117	1,482	△81	1,397	△85	
別 科	5	△ 1	3	△2	2	△1	2	±0	
高 校	音楽科	229	△36	221	△8	225	+4	262	+37
	普通科	165	+16	175	+10	196	+21	175	△21
	(計)	(394)	△20	(396)	+2	(421)	+25	(437)	+16
中 学 校	204	+11	209	+5	211	+2	207	△4	
小 学 校	336	△ 24	305	△31	298	△7	283	△15	
幼 稚 園	86	+4	88	+2	83	△5	90	+7	
合 計	2,789	△ 109	2,653	△136	2,588	△65	2,507	△81	